

HANDEL MESSIAH



**NIKOLAUS
HARNONCOURT**

NH

CONCENTUS MUSICUS WIEN

CHRISTINE SCHÄFER ANNA LARSSON MICHAEL SCHADE GERALD FINLEY



SICC 30330-1 / STEREO

© 2005 Sony Music Entertainment © 2012 Sony Music Entertainment
Manufactured by Sony Music Labels Inc. Made in Japan. Ⓢ is a Trademark.
WARNING: All Rights Reserved. Unauthorized duplication is a violation of applicable laws.

ヘンデル

オラトリオ「メサイア」HWV56(全曲)

独唱、合唱、管弦楽、チェンバロとオルガンのための3部からなるオラトリオ
テキスト：チャールズ・ジェネズ(聖書に基づく)

DISC 1 (Total time 69:43)

第1部

Part I / Teil I

- 1 第1曲 シンフォニー：グラヴェー・アレグロ・モデラート (3:20)
No.1 Symphony: Grave — Allegro moderato
- 2 第2曲 伴奏つきレチタティーヴォ：慰めよ、私の民を(テノール) (3:03)
No.2 Accompagnato: Comfort ye my people (Tenor)
- 3 第3曲 アリア：すべての谷は埋め立てられ(テノール) (3:48)
No.3 Air: Ev'ry valley shall be exalted (Tenor)
- 4 第4曲 合唱：このようにして、主の栄光が現わされると (2:32)
No.4 Chorus: And the glory of the Lord
- 5 第5曲 伴奏つきレチタティーヴォ：まことに、万軍の主はこう仰せられる(バス) (1:34)
No.5 Accompagnato: Thus saith the Lord (Bass)
- 6 第6曲 アリア：だれがこの方の来られる日に耐えられよう(アルト) (4:08)
No.6 Air: But who may abide the day of His coming (Alto)
- 7 第7曲 合唱：この方は、レビの子らをきよめ
レチタティーヴォ：見よ、処女がみごもり(アルト) (3:17)
No.7 Chorus: And He shall purify
Recitative: Behold, a virgin shall conceive (Alto)
- 8 第8曲 アリアと合唱：シオンに良い知らせを伝える者よ(アルトと合唱) (5:48)
No.8 Air and chorus: O thou that tellest good tidings to Zion (Alto and chorus)
- 9 第9曲 伴奏つきレチタティーヴォ：見よ、闇が地をおおい(バス) (1:53)
No.9 Accompagnato: For behold, darkness shall cover the earth (Bass)
- 10 第10曲 アリア：闇の中を歩んでいた民は(バス) (3:24)
No.10 Air: The people that walked in darkness (Bass)
- 11 第11曲 合唱：ひとりのみどり子が、私達のために生まれる (4:53)
No.11 Chorus: For unto us a Child is born
- 12 第12曲 ピファ(田園シンフォニー)
レチタティーヴォ：さてこの土地に、羊飼いが(ソプラノ) (1:03)
No.12 Pifa
Recitative: There were shepherds (Soprano)

- 13 第13曲 伴奏つきレチタティーヴォ：すると、主の使いが彼等のところに来て(ソプラノ)
レチタティーヴォ：御使いは彼等に言った(ソプラノ) (1:04)
No.13 Accompagnato: And lo! the angel of the Lord came upon them (Soprano)
Recitative: And the angel said unto them (Soprano)
- 14 第14曲 伴奏つきレチタティーヴォ：すると、たちまち、
その御使いと共に多くの天の軍勢が現われて(ソプラノ) (0:16)
No.14 Accompagnato: And suddenly there was with the angel (Soprano)
- 15 第15曲 合唱：いと高きところに、栄光が神にあるように (2:11)
No.15 Chorus: Glory to God in the highest
- 16 第16曲 アリア：シオンの娘よ、大いに喜べ(ソプラノ)
レチタティーヴォ：その時盲人の目は開かれ(アルト) (5:16)
No.16 Air: Rejoice greatly, O daughter of Zion (Soprano)
Recitative: Then shall the eyes of the blind (Alto)
- 17 第17曲 二重唱：主は羊飼いのように、その群れを養い(アルト、ソプラノ) (5:34)
No.17 Duet: He shall feed His flock (Alto, Soprano)
- 18 第18曲 合唱：私のくびきは負いやすく (2:59)
No.18 Chorus: His yoke is easy

第2部

Part II / Teil II

- 19 第19曲 合唱：見よ、世の罪を取り除く神の小羊 (2:47)
No.19 Chorus: Behold the Lamb of God
- 20 第20曲 アリア：彼はさげすまれ(アルト) (10:44)
No.20 Air: He was despised (Alto)

DISC 2 (Total time 71:35)

- 1 第21曲 合唱：まことに彼は私達の悩みを負い (2:02)
No.21 Chorus: Surely He hath borne our griefs
- 2 第22曲 合唱：彼の打ち傷によって、私達はいやされた (1:49)
No.22 Chorus: And with His stripes we are healed
- 3 第23曲 合唱：私達は皆、羊のようにさまよい (3:39)
No.23 Chorus: All we like sheep have gone astray
- 4 第24曲 伴奏つきレチタティーヴォ：私を見る者は皆、私をあざけります(テノール) (0:43)
No.24 Accompagnato: All they that see Him, laugh Him to scorn (Tenor)
- 5 第25曲 合唱：主に身を任せよ (2:21)
No.25 Chorus: He trusted in God
- 6 第26曲 伴奏つきレチタティーヴォ：そしりが私の心を打ち砕き(ソプラノ) (1:39)
No.26 Accompagnato: Thy rebuke hath broken His heart (Soprano)
- 7 第27曲 アリオソ：見よ、このような痛みがほかにあるかどうかを(ソプラノ) (1:18)
No.27 Arioso: Behold, and see if there be any sorrow (Soprano)

- [8] 第28曲 伴奏つきレチタティーヴォ：彼が私の民のそむきの罪のために打たれ(テノール) (0:21)
No.28 Accompagnato : He was cut off out of the land of the living (Tenor)
- [9] 第29曲 アリア：しかしあなたは私の魂を黄泉に捨て置かず(テノール) (2:17)
No.29 Air : But Thou didst not leave His soul in hell (Tenor)
- [10] 第30曲 合唱：門よ、お前達のかしらを上げよ
レチタティーヴォ：神は、かつてどの御使に向かって(テノール) (3:21)
No.30 Chorus : Lift up your heads, O ye gates
Recitative : Unto which of the angels (Tenor)
- [11] 第31曲 合唱：神の御使は皆、彼を拝め (1:36)
No.31 Chorus : Let all the angels of God worship Him
- [12] 第32曲 アリア：あなたは、いと高き所に上がり(アルト) (3:09)
No.32 Air : Thou art gone up on high (Alto)
- [13] 第33曲 合唱：主は御言葉を賜わる (1:16)
No.33 Chorus : The Lord gave the word
- [14] 第34曲a アリア：良いことの知らせを伝える人々の足は、なんと立派でしょう(ソプラノ) (2:01)
No.34a Air : How beautiful are the feet (Soprano)
- [15] 第35曲a 合唱：その声は全地に響き渡り (1:18)
No.35a Chorus : Their sound is gone out
- [16] 第36曲 アリア：なぜ国々は騒ぎ立ち(バス) (2:57)
No.36 Air : Why do the nations so furiously rage together (Bass)
- [17] 第37曲 合唱：さあ、彼等の枷を打ち碎き
レチタティーヴォ：天の御座に着いておられる方は笑い(テノール) (1:59)
No.37 Chorus : Let us break their bonds asunder
Recitative : He that dwelleth in Heaven (Tenor)
- [18] 第38曲 アリア：あなたは鉄の杖で彼等を打ち碎き(テノール) (2:04)
No.38 Air : Thou shalt break them (Tenor)
- [19] 第39曲 合唱：ハレルヤ! (3:56)
No.39 Chorus : Hallelujah!

第3部

Part III / Teil III

- [20] 第40曲 アリア：私は知っている。私を贖う方は生きておられ(ソプラノ) (5:56)
No.40 Air : I know that my Redeemer liveth (Soprano)
- [21] 第41曲 合唱：というのは、死がひとりの人を通して来たように (1:47)
No.41 Chorus : Since by man came death
- [22] 第42曲 伴奏つきレチタティーヴォ：
聞きなさい、私はあなたがたに奥義を告げましょう(バス) (0:40)
No.42 Accompagnato : Behold, I tell you a mystery (Bass)
- [23] 第43曲 アリア：ラッパが鳴ると(バス)
レチタティーヴォ：死は勝利に吞まれたとされるされている御言葉が実現します(アルト) (8:36)
No.43 Air : The trumpet shall sound (Bass)
Recitative : Then shall be brought to pass (Alto)

- [24] 第44曲 二重唱：死よ、お前の勝利はどこにあるのか(アルト、テノール) (0:58)
No.44 Duet : O death, where is thy sting? (Alto, Tenor)
- [25] 第45曲 合唱：しかし神に感謝すべきです (2:08)
No.45 Chorus : But thanks be to God
- [26] 第46曲 アリア：神が私達の味方であるなら(ソプラノ) (4:46)
No.46 Air : If God be for us (Soprano)
- [27] 第47曲 合唱：ほふられた小羊は (6:41)
No.47 Chorus : Worthy is the Lamb

クリスティーネ・シェーファー(ソプラノ)

Christine Schäfer, *soprano*

アンナ・ラーソン(アルト)

Anna Larsson, *alto*

ミハエル・シャーデ(テノール)

Michael Schade, *tenor*

ジェラルド・フィンレイ(バス)

Gerald Finley, *bass*

アルノルト・シェーンベルク合唱団(合唱指揮:エルヴィン・オルトナー)

Arnold Schoenberg Chor (Erwin Ortner, *artistic direction*)

ヘルベルト・タヘッツィ(オルガン)

Herbert Tachezi, *organ*

シュテファン・ゴットフリート(チェンバロ)

Stefan Gottfried, *harpsichord*

ヘルヴィヒ・タヘッツィ(チェロ)

Herwig Tachezi, *cello*

ニコラウス・アーノンクール指揮

Nikolaus Harnoncourt, *conductor*

ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス

Concentus Musicus Wien

Recording producer : Friedemann Engelbrecht

Sound engineer : Michael Brammann

Surround mix & digital editing : René Möller

Assistant sound engineer : Wolfgang Schiefermair

Executive producer : Christian Leins

Product management : Nicola Kremer

Live Recording : 17-21 December 2004 at Musikvereinssaal, Vienna (Austria)

ヘンデル：オラトリオ「メサイア」 ニコラウス・アーノンクール

ヘンデルの《メサイア》は、彼の生前に50回以上演奏された。これらの演奏の多くは、すでに1742年4月13日に行なわれた初演の場合と同様に、劇場や一般の演奏会場で行なわれた。この《メサイア》の教会における最初の演奏は、初演から9年後の1750年に、ロンドンの“孤児養育院”(Foundling Hospital)礼拝堂で行なわれ、ヘンデル自身が指揮にあたった。——教会、劇場、あるいは演奏会場の異なった音響空間は、様々な演奏が非常に異なった管弦楽編成ならびに合唱編成で行なわれたことを説明している。ダブリンでの初演では、合唱は各声部8名ずつ、合計32名の歌手で構成されていた。管弦楽は伝統的に合唱とほぼ同じ規模であったので、おそらく第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンはそれぞれ6〜8、ヴィオラは4〜5、チェロ2、コントラバス2、欠くことのできない通奏低音楽器(チェンバロ、オルガン)、そしてトランペット2とティンパニという編成であったろう。オーボエとファゴットは総譜には書き込まれていないが、当然ヘンデルは当時の習慣に従って、トゥッティの響きの色合いや輪郭づけ、強化に適したすべての個所で、それらの楽器を使った。また、このことは“孤児養育院”に伝えら

れている上演の資料によって証明されている。さらに、そこでの管弦楽は33名から成り、やや大きめの編成であった。

したがって総譜、言い換えれば音楽の本質は、かなり広大な枠組みの中では編成の大きさに変わることはない。ここでいっそう大きな役割を果たすのは、空間の音響である(例えばバッハのカンタータやオラトリオのような当時の他の総譜は、はるかに固定的であり、合唱や管弦楽の編成は楽器間に必要な均衡^{バランス}によって、いっそう繊細に規定されている)。ヘンデルの死後間もなく、彼のオラトリオはまさに巨大な編成で演奏された。例えば1784年のウェストミンスター大寺院^{アビビー}での演奏は、300名の合唱と250名の管弦楽(ヴァイオリン95、ヴィオラ26、チェロ21、コントラバス15、オーボエ26、ファゴット28、ホルン12、トランペット12、トロンボーン6)で行なわれ、独唱パートも勿論複数の歌手で歌われた。だが、ホルンとトロンボーンは何を演奏したのだろうか。1781年のベルリンでの演奏は185名の管弦楽で、同じ年のライプツィヒでの演奏は90名の合唱と127名の管弦楽で行なわれた。反響する教会の空間と巨大な編成は、確かにテンポに影響したであろう。しかし、ヘンデルの作品それ自体の本質は、それによって侵されることはなかったと考えられる。

ヘンデルは彼の《メサイア》をわずか21日で作曲し

た。すなわち、彼は8月22日(ヘンデルの自筆総譜への記入:「1741年8月22日に〔作曲〕開始」)から9月12日(自筆譜への記入:「オラトリオの終わり」)G.F.ヘンデル9月12日)までの間に、この作品を一気に作曲したに違いない。そして楽器編成は2日後に仕上げられた:「1741年 同月14日に書き込まれた」。

初演当初から《メサイア》は聴衆に大好評であり、深い感銘を与えたに違いない。当時の新聞記事は「これまで聴いた音楽のうちで最もすばらしい作品」と述べている。もっとも、非常に自負心の強い台本作者チャールズ・ジェネズは、いつものようにヘンデルに2、3のとがめだてをしなくてはならなかったが。「私はヘンデルに、私自身が非常に高く評価している《メサイア》の台本を渡しました。そしてヘンデルは、彼がなすことのでき、またなさねばならないはずの仕上がりには及ばないものですが、見事な音楽をそれから作り出した。この作品の非常に大きな欠点を彼に改めさせるのに、私はとても苦勞しました。しかし、彼は序曲では自分の意見を頑固に譲りませんでした。その序曲にはヘンデル自身に、いやさらに《メサイア》に似つかわしくない2、3のバグページがあるのです」。

ヘンデルは、彼にこの壮大な「催し物」のお祝いを述べられたキンノール脚に対して、「私は、ただ彼らを楽しませただけならば遺憾に思います。私は彼らを、よ

り良くしたいと思っております」と答えたと言われている。そして、数多くの再演は異なった場所で、それぞれ新しい状況の下で行なわれたので、ヘンデルは総譜に度々手を加えなければならなかった。そのために、今日我々がいわば最終の、信頼できる稿を見つけようとすることは困難なのである。

私は、異なった稿の各々に関して、その成立理由を見出し、特定の上演における必要な状況から何が生じ、どのように発展していったかを認識するように努めた。この比較の際に特に私の目についたのは、どの変更も作品全体の構築法には関係していないことである。この音楽的で劇的な構築法は、私にはますます明確になり、ついに、作品全体の首尾一貫性に関する重大な損失を甘受したくないならば、この作品は決して省略して演奏されるべきではないという確信を得た。実際、この作品は以前には(18世紀末や19世紀には)、ばらばらの各部分をつなぎ合わせたものと考えられていたのである。例えば、この作品をベルリンで指揮したツェルターに宛てて、ゲーテは次のように書き送っている。「私は、これがきわめて豊かな個々の部分を並べた曲集であるという風には考えたくありません。というのは、開始部や終結部でまとまりが形づくられているかどうかは、根本においてどうでもよいことだからです。とにかく、まとまりを生み出しているのは常に精神

であり、キリスト教の旧約聖書および新約聖書の意味においてまとまりが見られるのは、勿論のことでしょう」。

どの典礼形式にも適さず、旧約聖書・新約聖書と自由詩とを結合したこの素材それ自体、この作品を他の比較しうるオラトリオから際立たせている。ヘンデルは、動機^{モティーフ}の相互関連、調性関係、独唱者と合唱への分配などによって楽曲内部の関係が強められるように、このテキストを作曲した。作品は明確に区切られた次の3部分で構成されている。

第1部 救世主の告知。救世主であるイエスの降誕と生涯。

第2部 キリストの受難による救済の成就。人間による拒絶。救世主の勝利。

第3部 死の超克に対する感謝の賛歌。

第1部

次に、私はこの作品の個々の楽曲を順に吟味し、我々の演奏に関して最も重要な点を説明したい。**第1曲「シンフォニー」**は、ざっと見るとフランス序曲であり、付点リズムの導入部、フーガとして書かれた速い中間部、3小節に縮小された緩やかな終止部から成る。まさに型にはまった単純なリズムの第1部が注意をひく。私には、ここでヘンデルがフランス序曲に特有

な、常に英雄的性格を与える全体にわたる鋭い付点リズムを考えているはずはないように思われる。そしてまた、「希望のない」調性であるホ短調も、外向的なフォルテの輝きとは相容れない。元来ヘンデルは第2部分を普通に「正確なテンポで」(a tempo giusto)、つまり序曲のアレグロ楽章として表示したが、後になってそれを変更してアレグロ・モデラートへ和らげた。導入動機の手探りするような性格は、表現が控えめであることのさらに別な証拠である。演劇理論の上からは、おそらくこの序曲は待つことの憂うつな状況、救済されない人類の神経質な不安を表わしている。——このホ短調の終止のすぐ後に、**第2曲**レチタティーヴォ・アッコンパニヤートのホ長調和音が続くが、これは慰めるように頼もしく、明るくする。そして上声に嬰ト音があるため、とくに効果的に響く。音楽的には、そのことによって序曲とレチタティーヴォとの間の緊密な関係が要求されている。この楽曲、そして同様に構築されたこの作品の他のすべてのレチタティーヴォ・アッコンパニヤートの様式は、歌手に自由なリズムを求めている。もっとうまく言うと、レチタティーヴォのバツセージでは、記譜されたものを書かれた通りに正確に歌う代わりに、純粋な語りのリズムが求められているのである。次の**第3曲アリア**では、救世主に広い道を準備するために(“make straight……a highway

for our God”)山と谷がならされる様子が、具象的に描かれている。——このアリアのすぐ後には、幸せを保証する**第4曲合唱**が続く。ここで間を置かず合唱に移ることは、テキストの面からも調性関係からも、異論の余地なく要求されている。アリアの最後の音符上のフェルマータ記号(∞)は、この移行の妨げになるように思われるが、この記号はヘンデルの場合には別の機能をもつ。ヘンデルはこのアリアの後奏を終わりで記譜する代わりに、前奏をこの記号のところまで(si scriva fin al Segno :)もう一度書くように、筆写者のために印づけたのである。“アレグロ表示”ではなく、様々な縦線もこの合唱のテンポと性格を規定している。すなわちここでは、各小節の後に各パート毎の短い縦線、4小節毎に全パートを通る長い縦線が引かれている。残念ながら、この重要な細分化は現代譜では見分けることはできない。——この合唱が表現している晴れやかな喜びには、崇高な畏敬の情緒をもつ**第5曲**レチタティーヴォ・アッコンパニヤートが続く。再び、調性関係からも劇的な対照性からも、すぐに続けて演奏することが要求されている。付点リズムの和音は、「万軍の主」(“the Lord of Hosts”)が仰せられる偉大さと後ろ楯を表わしている。——ヘンデルは、通例どおりにレチタティーヴォ・アッコンパニヤートとアリアとが同一の歌手によって歌われるように、続く

第6曲アリアを(最初は)バスのために書いた。後になって彼はアルト用に新たな稿を構想したが、それは有名なカストラート歌手グァダーニのためであった。しかし、また女性アルト歌手がこのパートを歌う場合にも、ヘンデルはこの稿を保持した。おそらく、彼はここで第5曲レチタティーヴォ・アッコンパニヤート、第6曲アリア、第7曲合唱という作劇法上の流れを最終的に、そして決定的に変えようとしたのであろう。

元来の稿:レチタティーヴォ・アッコンパニヤートとアリアは両方バスによって歌われる。テンポ表示はアンダンテ・ラルゲット(ヘンデルの場合、かなり流暢なテンポ)。「だれがこの方の来られる日に耐えられよう、だれがこの方の現われるとき立っていられようか。まことに、この方は精錬する者の火のようだ」(“But who may abide the day of His coming, and who shall stand when He appeareth? For He is like a refiner's fire”)——この全3行は同じシチリアーノのテンポで作曲され、“火”という言葉だけに、かなりゆっくりした16分音符のコラトゥーラが付されている。アリアは、第1行の動機から成る静かな後奏で終わる。その次に、クライマックスとして合唱「この方は、レビの子らをきよめ」(“And He shall purify”)が続く。

新しい稿:レチタティーヴォ・アッコンパニヤートは前稿

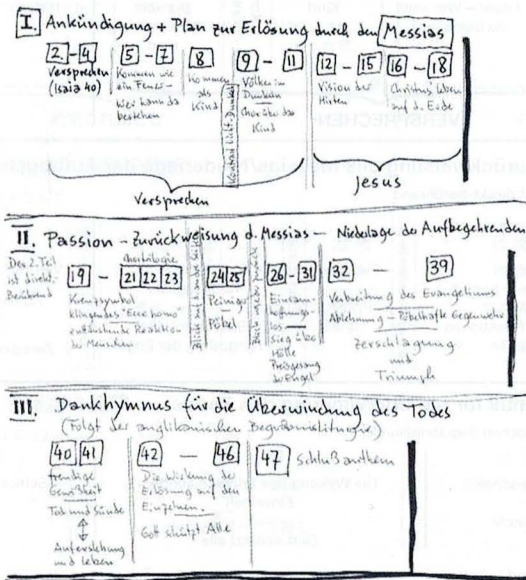
と同様にバスによって歌われるが、アリアはアルトによって歌われ、その時にテンポはラルゲットに和らげられる。そして第3行はプレスティッシモで、弦楽器群による興奮様式の荒れ狂うような16分音符で新たに作曲され、さらに第2行も組み入れられる。その後、擬似ダ・カーボ様式で第1行と第2行のラルゲットが繰り返され、第3行と第2行が付された新しいプレスティッシモがそれに続く。今回のアリアは短い後奏で終わり、それはすぐに第7曲合唱へ移る。レチタティーヴォ・アッコンパニャートで告知された威圧的な、この世を震撼させる救世主の到来は、ここではアルトの心配そうな反応の原因として作用している。主は火の如く善と悪とを分けられるのに、誰が立ち得ようか。この火は、ヘンデルがかつて用いた最も速い、猛烈なテンポで表現される。こうして、非常に個人的で人間的な反応が一群の流れの中心に立ち、神官による潔め(第7曲合唱)は再びややおごそかで静める印象を与える。この、おそらく最終の稿に至る過程で、ヘンデルは第1稿の第6曲アリアを1音高めて(ホ短調)テノールに歌わせ、アルトの稿を高く様々に(ホ短調とト短調へ)移調して、ソプラノに歌わせている。

第7曲合唱は、第11曲、18曲、23曲の合唱と同様に、すでに作曲された二重唱から改作された。この由来は、非常にゆるく編まれた楽曲構造の中に見分

けることができる。小編成の管弦楽に注釈された2つの合唱声部が、何度も何度も目立たされ、いわばアンティフォナ風に合唱全体によって応答されるからである。“真に”4声の部分(例えば21-25小節と終結部)は、ヘンデルが改作する際にはじめて付け加えたのである。この合唱が第1部分を閉じる。ここまでは休止も、段落もなく、1つの楽曲は他の楽曲から休みを置かずに現われる。

ここで私はアーティキュレーションの問題、すなわち小さな音価を“述べる”時の続け方や切り方の問題を、簡単に述べておきたい。ともかく、最後に述べた合唱では、合唱パートにも器楽パートにも数多くの16分音符群が見られる。ヘンデルは、アーティキュレーションの弧線や他の記号を例外的な場合にのみ書き記している。しかし、このことから、すべての音符は切って演奏されねばならないことが決して結論づけられてはならない(そのような演奏方法は、逆の誤解によって今日“バッハ・ダッシュ”と呼ばれている)。そうではなく、アーティキュレーションはおおむね演奏家が判断すべきことであり、作曲家の仕事ではなかったのである。このことに関する規則は、当時はよく知られていたもので、作曲家は規則からはずれた、特別のアーティキュレーションをしたい箇所だけ表示することになった。そしてその場合、合唱パートと器楽パートには、よく考えられた古

アーノンクールによる 「メサイア」構成分析図

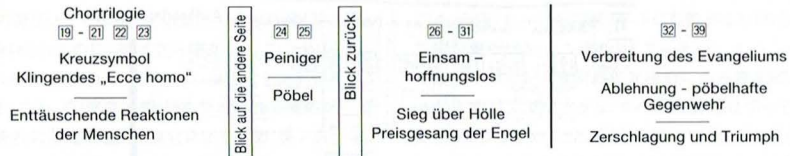


I. Ankündigung und Plan zur Erlösung durch den Messias



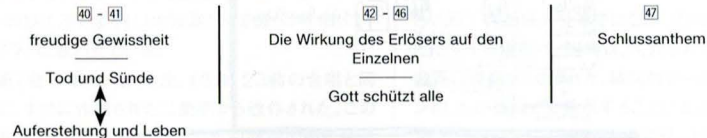
II. Passion Zurückweisung des Messias/Niederlage der Aufbegehrenden

Der zweite Teil ist direkt-berührend

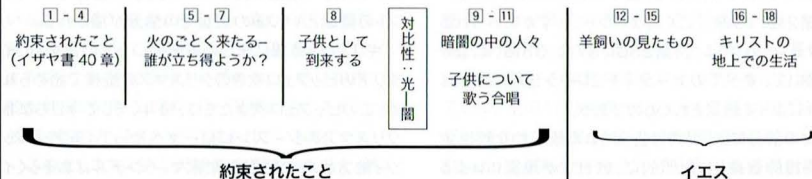


III. Dankhymnus für die Überwindung des Todes

(folgt der anglikanischen Begräbnisliturgie)

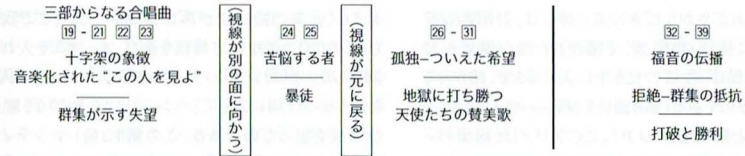


I. 救世主による救済の告知



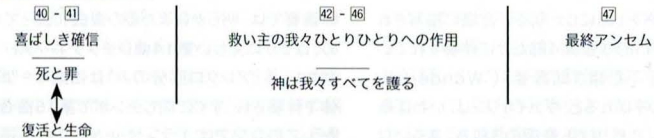
II. 受難：救世主の拒絶／逆徒の敗北

第2部は直接的に感動をもたらす



III. 死の超克による感謝の賛歌

(英国国教会の葬礼の儀に従う)



くからの実践にしたがって、一貫して別々にアーティキュレーションが付された。若干のタイによるヴィブラート(第2曲、15曲)、ごく稀なスラー、わずかにみられるアクセントのダッシュ(第23曲、37曲、38曲、47曲)を除いて、すべてのアーティキュレーションの記号は我々によって補足されたものである。

次の部分では、以前に告知された威圧的な救世主の英雄的到来とは対照的に、救世主が現実にはよるべのない子供として到来することが予言される。レチタティーヴォ・セッコ、**第8曲アリアと合唱**：心配は無用、神はたいまつを持たずに、子供として到来する。この約束のおだやかな輝きの直ぐ後には、対照的な平行短調(二長調/口短調)で描かれた暗い情景が続く。地上の民は、救済の光を手に入れるまで、暗がり待ち続けるのである(**第9曲**レチタティーヴォ・アッコンパニヤートと**第10曲アリア**)。このアリアは、器楽パートと歌手とを手探りするようなユニゾンで進めて暗さを描き出してゆくが、現われる光が述べられる時には、このユニゾンはいつも2声に分かれる。この柔らかな光は、**第11曲**の2声を1組にした明るい合唱に描写されており、所々でソロ的な弦楽4部だけに伴奏されている。子供の名が「不思議な助言者」(“Wonderful, Counsellor”)と呼ばれると、ヴァイオリンは、いわば幸せに酔いしれて、二長調やト長調の3和音、あるいは

ハ長調3和音の周りをまわる。——これで予言と約束という両方の段階は終わりである。次の部分では、キリストの降誕とキリストの現世での生涯が描かれる。

キリストの降誕にまつわる羊飼いたちの音楽は、イタリヤのピッフェロ吹きのクリスマスの旋律で始められる。このピッフェロ吹きたちは、毎年、そして今日もなおクリスマスのシーズンにローマへやってくるアブルッツィ地方出身の民俗音楽家で、ヘンデルはおそらくイタリヤで耳にしたのであろう。彼は元来この**第12曲ピファ**の内、最初の11小節だけを作曲したが、後にこの楽曲を32小節に拡大した。しかし、最後の上演では、おそらく元来の短い稿が再び演奏された。そこで我々も、このCDでは短い方の稿を選び、オーボエを入れて演奏した。次に、ソプラノが初めて歌う。このように入りを遅らせる作用によって、ヘンデルは感動的な、意外な効果を狙ったのである。この**第13曲**レチタティーヴォ・アッコンパニヤート、アンダンテは、我々の場合には弦楽4部のみで伴奏される。ヘンデルは、これを後になってアリオソの形に作曲し直しているが、晩年の演奏では、明らかにまたこの楽曲に戻っている。次の、はるかに激しい**第14曲**レチタティーヴォ・アッコンパニヤート(アレグロ部分のみ)は弦楽オーケストラ全体で伴奏され、すぐに同じテンポで**第15曲合唱**へ向かう。この合唱では、トランペットがはじめて、遠くから響

きわたる。この非常に劇的な効果は、雲が切れ、天使達が歌いながら現われる様子をおそらく音で描写しているであろう。天使の輝かしい喜びは弦楽器群の3度の音階によって、地上の喜びは優しく慰めるタイによるヴィブラートで表現されている。合唱は同様に劇的な効果で終わる。すなわち、天使が消え去ることが、弦楽4部のディミヌエンドで描かれているのである。

このクリスマスの天使の幻影が消えると、続く4つの楽曲で現世におけるイエスの生涯が描かれるが、それは写実的な方法ではなく、聖書の言葉の抽象的なイメージとして行なわれる。この部分の最初の**第16曲アリア**「大いに喜び」(“Rejoice greatly”)は、元来ジーク風の12/8拍子で書かれたが、我々がここで演奏したのは第2の、そしておそらく最終の稿である4/4拍子の方である。このアリアも、ヘンデルが指揮をした上演では、時々テノールによって歌われた。——「その時盲人の目は開かれ、聾者の耳は開けられる;その時足なえ人は鹿のようにとびはね、おしの舌は(——語るのではなく——)喜び歌う」というイザヤの予言は、その素晴らしい描写によってヘンデルを鼓舞し、彼が作曲した中でも最も美しいシチリアーノ・アリア(**第17曲**)へ向かわせた。これは明らかに予言されたおしの歌である。ここでも、我々が選んだのは初演の稿(変口長調のソプラノ・アリア)ではなく、ヘンデル自身

がより良い表現として晩年に好んだアルトとソプラノのための二重唱の稿である。ここでは、予言的な第1部分(イザヤ書第40章第11節)と促しを述べている第2部分(マタイによる福音書第11章)が、ハ長調から変口長調への調性の変化によって見事に対照されている。主のくびきを負うようにという促しの結論として、すぐに——前曲と結びつける架空の言葉「なぜなら(Denn)」があるかのように——**第18曲合唱**が続く、このくびきのやさしさと軽さをほめ、救世主の教えに従う人々の幸せを讃える。

第2部

第2部は、救世主の救いの御業の描写で始まる。ここでは、直接的な、心を動かす人間的感動、いや驚きさえ感じられる。**第19曲合唱**「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(“Behold the Lamb of God”)は、きわめて大きな劇的緊張を保ちながら何気なく情景に目を向けさせ、罪なく苦しむ小羊を指さす。ト短調による悲しみは、付点リズムによって荘厳なものへ浄化される(バロック時代のフィグーレン・レーレでは、一貫した付点リズムは常に英雄的なものを指す)。第17曲(「主は羊飼いのように、その群れを養い」)との動機関連によって、両方の比喩的象徴の内容的関連が明らかにされる。慈悲深い牧者は、今度はその群れのため

にいけにえの小羊を捧げるのである。——第20曲のアルトのアリアは、音楽化された“この人を見よ” (“Ecce homo”[訳注1])であり、おそらく作品の精神的中心、改宗へのかなめである。

次の合唱曲群第21曲、22曲、23曲は、むち打つリズムが続いていることによって、先行するアリアと固く結ばれている。しかし、前曲ではむち打ちが直接的に描写されているのに対して、ここではその苦しみが我々のための苦しみであることが信者によって認められる。——第22曲「彼の打ち傷によって、私達はいやされた」 (“And with His stripes we are healed”) では、主題の最初の4音で十字架が音楽象徴として描き出されている。第21曲と第22曲は、ヘンデルの自筆総譜では、ひとつながりの楽曲としてははっきり示されており、拍子の変化とテキストの違いのみによって分けられている。第23曲の合唱では、救世主の御業が理由づけられる。我々人間が何度も逃げ去り、各人が強情に自分自身の道を進もうとする様子(その動機は執拗に同じ音を繰り返す)、そしてそのために神が我々の罪を救世主の上に置き給うたこと(重くのしかかるように下行して保続低音になる2度進行によって、強い調子で描き出される)が、非常にはっきりした音形で描写されている。——次に視線はいわば別の面に向かい、我々は、拷問吏を目にする。彼らは十字

架にかけられた者をあざ笑い、無慈悲で下品な合唱ではずかしめる。これは、下役達がいわば自ら歌う数少ない合唱の一つである。次に、この人間の憎しみの描写とはきわめて対照的に、キリストの非常な孤独、さらに絶望感さえ示される。続く4つの楽曲、第26曲レチタティーヴォ・アッコンパニャート、第27曲アリオソ、第28曲レチタティーヴォ・アッコンパニャート、第29曲アリアは、第24曲レチタティーヴォ・アッコンパニャートと同様に、今日ではおおむねテノールによって歌われる。これら5曲の各々は、ヘンデル自身が指揮をした演奏では、ソプラノまたはテノールによって歌われたこともあった。しかし注意をひくのは、これらすべての楽曲がただ1人の歌手に任せられた演奏は、明らかに一度もなかったことである。我々は、明らかにヘンデルも良い表現として選んだ稿にしたがい、第26曲と第27曲をソプラノで、第28曲と第29曲をテノールで演奏した。そのような分割によって、述べられていることの違いが非常に明瞭に認められるのである。最初の2曲は内面的な苦しみについて、次の2曲は死について、そして地獄の辺土へ哀れな魂の救済に下ることについて述べている。その後すぐに、人間の死と冥土に対する勝利者がマーチ風の合唱による対話で祝される(第30曲)。短いレチタティーヴォ・セッコは、簡潔な聖書の引用で救世主をすべての天使の上に立つ神の子

と呼び、第31曲の天使たちの賛美歌へ導く。こうして、苦しみと死の後でキリストの昇天が描き出されてゆく。この合唱の主題はコラル「目覚めよと呼ぶ声あり」 (“Wachet auf, ruft uns die Stimme”) から引用されており、それもおそらく第3節「グローリア……いと高きところ、汝の玉座をかこむ天使よ」 (“Gloria… der Engel hoch um Deinen Thron”) が使われている。そしてこのコラルの引用によって、この合唱は最後に続く勝利の歌であるハレルヤと動機的にも精神的にも結び付けられている。

新しい部分では、今度は受難と復活に対する反応が示される。まず第32—35曲では福音(あの出来事の知らせ)の伝播と受け入れ、その後第36—39曲では福音に対する抵抗と福音の勝利も描かれる。——第32曲アリアは、最初にはアレグロと表示され、バスのために作曲された(この形では明らかに一度も演奏されなかった)。しかし後になって、おそらくある重要な独唱者のためにアルト用に書き換えられ、さらに手を加えられてアレグロ・ラルゲットと表示された。このアリアは、ヘンデルが指揮をした演奏では、時おりソプラノによって歌われることもあった。次の第34曲aアリアと第35曲a合唱は、幾つかの稿で伝えられている。元来、このソプラノ・アリア(第34曲a)は(後に作曲された)合唱のテキストが付された中間部をもっていた。そ

の後、ヘンデルはやや手が加えられたテキストを二重唱と合唱に作曲し、それからテキスト全体に基づくテノールとソプラノのアリオソを書いた。そして最後には、元来のソプラノ・アリアに戻ったように思われる。しかし、彼はその際に中間部とダ・カーボを削除して、中間部のテキスト「その声は全地に響き渡り」 (“Their sound is gone out”) に基づく合唱を作曲した。いろいろな試みの後に見出されたこの草稿が、私には最終稿、すなわち他のすべての稿に対する改訂であるように思われる。福音史家達は愛らしいバストラーレとして描写され、その後合唱は福音が抑えられることなく伝播してゆくことを印象づける。——この喜ばしい情景は、際立った直接的対照を成す、反目する信仰の敵についての興奮した報告によって妨げられる(第36曲バス・アリア)。このアリアでは、ヘンデルは予想されるダ・カーボを放棄し、その代わりにすぐに第37曲合唱に導いている。第2の(第25曲と並んで)真の群衆の合唱であるこの曲では、救世主のやさしくびぎへの反抗がきつい4度跳躍で叫ばれる。テノールは怒りを表す第38曲のアリアで、激しく、具象的に表現するヴァイオリンの音形に支えられ、この反抗が打ち碎かれる様子を描写してゆく。そして、この争いの終結は勝ち誇ったハレルヤ合唱(第39曲)で祝される。この合唱では、「この世の国は」 (“The Kingdom of

this world”)の歌詞(33—35小節)に対してコラール「目覚めよと呼ぶ声あり」(“Wachet auf”)の他の行、すなわち第1節「いざ花婿が来たりて」(“Wohlauf der Bräutigam kömmt”)が引用されており、「主は永遠に支配される」(“and He shall reign for ever and ever”)の歌詞(41小節以下)には、以前の第31曲合唱と同じ行が引用されている。

第3部

救世主は到来し、救世主の救いの御業は成就された。このオラトリオの第3部は一種の感謝の祈りである。死は今やその恐ろしさを失ったのである。「私は知っている。私を贖う方は生きておられ」(“I know that my Redeemer liveth”)はテキストというより歌であり、ヘンデルの妹が非常に好んでいた。そしてヘンデル自身もこの詩句を個人的信仰を励ます手がかりと感じていたように思われる。この**第40曲アリア**のテキストは、コリント人への第1の手紙とヨブ記から構成されている。——続く**第41曲合唱**では、死と罪が復活と生命に対照されている。しかし、対比は余り大きくはないように思われる。悲しみの部分、グラウヴェは合唱のみで、全く器楽伴奏なしで歌われる——このような個所はこの作品中ここだけなので、はっきりと強調されねばならない——。そして、うれしい部分、アレグロは

フォルテで、全管弦楽の伴奏によって歌われ、その管弦楽は歓呼する対声部を演奏する。この歓喜のイ短調終止の直後に、弦楽器群による神秘的な二長調和音の上で、最後の審判の日における変容の神秘が我々に予言される。

ヘンデルは様々な調性の性格描写をあらかじめ刻印づけられた型とおりのものとはかなり違う、非常に個人的な形で使っている。おそらく彼はそのことによって、当時の敏感な聴衆に非常に強い印象を与えたであろう。例えば、死の悲しみにハ長調(厚かましきや喜びの調性)、この曲のように喜ばしい確信を歌うアリア「私は知っている。私を贖う方は生きておられ」(“I know that my Redeemer liveth”)にホ長調(非常に大きな苦悩と悲しみの調性)を指定した場合である。しかし、この第40曲の場合には、生に堪えるために、永遠の生命の確実さを必要とする苦しんでいる人間も、おそらく同時に描かれているのであろう。第41曲合唱の調性イ短調は、「何かを訴えながら、眠りに誘う……そして過度に甘美な」と記述されている。第1の対照「というのは、死がひとりの人を通して来たように死者の復活もひとりの人を通して来たからです」(“Since by man came death, by man came also the resurrection of the dead”)は、ことにアレグロ部分がハ長調であるので、ここではまさしく期待

に添い、「喜びをその成り行きに任せる」。第2の対照であるアダムによる死——キリストによる生は、ト短調(「もっとも美しい調性……慕わしい哀悼にも用いられる」)から二短調(「敬虔と帰依」)になり、そしてイ短調で歓呼して終えるために「生かされる」(“alive”)という言葉でホ長調(「悲しみの、身を切るような……魂と肉体との分離」)へ転じる。したがって、考えが豊かさや深みを得ることができるよう、音楽とテキストの性格はしばしば調性の性格と対照を成しているのである。神秘的な**第42曲**レチタティーヴォ・アッコンパニャントは、「騒々しい、元気づける」二長調で書かれている。そしてここでは、勿論同じく二長調の**第43曲バス・アリア**に向かって、表現の劇的な高まりが緊張をはらんだ調性で支えられている。このアリアは、このオラトリオ全体の中で際立って長い。ここでは、救い主の我々ひとりひとりへの作用が描き出されてゆく——「私達は変えられる」(“we shall be chang'd”)。続くアルトのレチタティーヴォ・セッコ、**第44曲二重唱**、**第45曲合唱**は、コリント人への第1の手紙からの連続したテキストに基づいて作曲されている。17小節【訳注2】の省略は、ヘンデル自身によるものである。ヘンデルは複縦線なしに、つまり二重唱から直ぐに続けて第45曲の感謝の合唱を作曲した。続く**第46曲**、ト短調のソプラノ・アリアは、信者の揺るぎない信頼を表現している。

ヘンデルはこのアリアを移調して、時おりアルト歌手に歌わせた。この曲は音楽的にはトリオ・ソナタのように作曲されており、下地を作り出している非常に簡素な通奏低音の上で、ヴァイオリンと歌唱パートには様々な動機素材が用いられる。歌唱パートの音形は時おりヴァイオリンに模倣され、いわばテキストに関連して引用されることもある。例えば第112小節から第118小節「死んで下さった方、いや、甦られた方であるイエス・キリストが」(“It is Christ that died, yea rather, that is risen again”)では、ヴァイオリンは「誰が私達に敵対できるでしょう」(“who can be against us?”)の動機を奏でる。

トランペットやティンパニも入る全楽器群で奏される二長調の**第47曲最終合唱**は、大規模に組み立てられたアンセムである(イギリスでは、典礼で歌われない英語の宗教的な合唱音楽“全能の神を称えるための賛歌やそれに類した歌”はアンセムと呼ばれた)。

この楽曲では、正確なテンポをできるだけ誤解のないように指示しようとヘンデルが努力した様子が、とくにはっきりわかる。最初に彼は「きちんとしたテンポで」(a tempo ordinato)、つまりほぼ「普通の」しっかりした速度で、と書いた(第5曲「まことに、万軍の主はこう仰せられる“Thus saith the Lord”」、第30曲「門よ、お前達のかしらを上げよ“Lift up your heads”」、

第35曲「その声は全地に響き渡り」"Their sound is gone out"」も、古風で厳格なこの表示をもつが、第5曲の場合にはヘンデルはそれを再び削除している)。しかし、ヘンデルはこの指示を消してラルゲットと書いた(ヘンデルの場合には、むしろ迅速で軽快な速度)。そしてさらに訂正して、ラルゴへ遅めた。したがって、このラルゴは何度も熟慮した結果であり、訂正されないでそこにある場合よりはるかに多くのことを語りかけている。さらに、ヘンデルは4/4拍子(C)の各小節の後に各パート毎の短い縦線、2小節毎に全パートを通る力強い縦線を引いている。このことから4/2拍子の印象が生じるが、これもテンポの選択に疑いもなく影響を及ぼしたであろう。——私はこの機会に、この作品における当時としては非常に盛りだくさんのテンポ表示を指摘しておきたい。そしてこの表示は、さらに数多くの訂正(現代譜では残念ながら見てとることはできない)によって厳密に規定されている。ここで、ゆっくりしたテンポから速いテンポへ、順に書き記しておこう。ラルゴ、グラヴェ、アダージョ(2、3小節または小節グループに関してのみ)、ラルゲット(非常に頻繁)、アンダンテ・ラルゲット、アンダンテ(非常に頻繁)、ア・テンポ・オルディナート、ア・テンポ・ジュスト(削除された)、アンダンテ・アレグロ、ボンボソ・マ・ノン・アレグロ(1回、アンダンテを削除して)、アレグロ・ラルゲット(1

回)、アルラ・ブレーヴェ・モデラート(1回)、アレグロ・モデラート、アレグロ(非常に頻繁)、プレスティッシモ(1回、第6曲)。勿論これらの表記は、拍子記号やヘンデルの場合しばしば非常に技巧的に用いられている縦線との関連において、初めて最終的な意味を得る。

つまり、この“最終アンセム”もテンポの面から洗練された作劇法によって構築されているのである。救い主の小羊の讃美、ラルゴ、6.5小節:熱狂した理由の説明「力を受ける」("to receive power")、アンダンテ:繰り返し、ここでは「神と」("to God")という暗示的な言葉の繰り返しのためにラルゴ部分が1小節延ばされている。この導入部に、フーガ風に作曲された急速な部分が続くが、ラルゲットという表示でややブレーキをかけられている。主の讃美「讃美と誉れと」("Blessing and honour")における次第に高まる感激は、きわめて古くからの駆り立てるリズム ♪♪とヴァイオリンのスピッカート音形でさらに燃え立つ。この部分にラルゲットという表示がなければ、我々は急速なアレグロと思い込むに違いない。したがって、この表示はおそらく絶対的なものではなく、むしろ速すぎるテンポへの警告であろう。弦楽器のスピッカートは、はるかにゆっくりしたテンポでは、効果的に演奏することができないからである。ブレーキとしての荘重なアダージョ

「永遠に」("forever and ever")の後に、この作品を締めくくるアーメン・(擬似)フーガがアレグロ・モデラートで続く。つまり、このフーガは、より大きい音価のためにややゆっくりの印象を与えるが、絶対に先行の部分より速めである。したがって、最終アンセム全体の基礎になっているのは、巧みに包み隠された、緻密なアツチェレランドである。——アーメン・フーガが20小節の間典型的に展開されると、ヴァイオリンが間奏に導く。これは、巨大なフーガ作品を予期させるが、10小節後に全声部による合唱へ解消する。我々が古い時代のイタリアの合唱音楽(例えばモンテヴェルディ)から知っているような、反進行も織りまぜた7回のストレッタがこのアーメンの核心を形づくり、その後72小節以下の一種のコーダでは、この部分のすべての重要な着想が要約される。

【訳:寺本まり子】

(訳注)

- 1)ピラトがいばらの冠をかぶったキリストを指して言った言葉(ヨハネによる福音書第19章第5節)。
- 2)この二重唱では第5小節から第23小節に飛ぶことが一般に行なわれている。

[この一文は、アーノンクールによる1982年録音の「メサイア」の発売に際して書かれたもので、今回の発売に当たって、細部に改訂の手が加えられている。]

ニコラウス・アーノンクール

1929年12月6日、ベルリン生まれのオーストリアの指揮者、チェロ奏者。

グラーツで育ち、ウィーンでチェロを学び、1952年から1969年までウィーン交響楽団のチェロ奏者をつとめられた。古楽、古楽器の研究・収集にも力を注ぎ、1953年には妻のアリスとともにオリジナル楽器によって演奏を行なうウィーン・コンツェントゥス・ムジクスを結成、4年間の研究を経て1957年には同団の初コンサートを開催している。

1970年代に入ると、チューリヒ歌劇場を中心にオペラの指揮も始め、名演出家のジャン・ピエール・ボネルと組んだモンテヴェルディとモーツァルトのシリーズを上演して注目を集めた。また1970年代からは、復活祭に演奏されるパッサの受難曲の演奏をきっかけにアムステルダム・コンセルトヘボウを指揮するようになり、一連のモーツァルトやハイドンのオーケストラ曲演奏で大きな注目を浴びた。1980年代からはウィーン・フィル、1990年代からはベルリン・フィルを指揮するようになり、ヨーロッパ室内管弦楽団との緊密な活動でも知られるようになるとともに、レパートリーもベートーヴェン、シューベルト、シューマン、ブルックナー、ブラームス、ドヴォルザーク、そしてヨハン・シュトラウス、ヴェルディ、ワーグナー、ベルクの作品へと広げるように

なった。毎年グラーツで行なわれるシュティリアルテ音楽祭を主宰。

1972年から1993年まで、ザルツブルク・モーツァルトウムで演奏実践に関する講義を行ない、著書も多い。1999年には生誕70年を記念して、モーニカ・メルトルによる評伝(邦題『未踏の領域への探求者 ニコラウス・アーノンクール』)が出版されている。

1963年からテレフンケン(現ワーナー・ミュージック傘下のテルデック)のダス・アルテ・ヴェルク・レーベルにレコーディングを開始し、1971年から1990年まで20年がかりでグスタフ・レオンハルトと共同で完成させた記念碑的なバッハの教会カンタータ全曲録音をはじめ、バロックから後期ロマン派にいたる幅広いレパートリーの録音を残している。

2003年夏からはBMGクラシックス(現ソニー・クラシカル)と契約を結び、ウィーン・フィルとのブルックナーの交響曲第9番とスメタナの「わが祖国」のリリースを皮切りに新たな録音活動がスタートした。ウィーン・フィルのみならず、ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス、ヨーロッパ室内管弦楽団、バイエルン放送交響楽団との録音プロジェクトなど、発売されたディスクはいずれも高い評価を受けている。2016年3月5日ザルツブルク近郊にて逝去。

<http://www.styriarte.com/harmoncourt/>

(シュティリアルテ音楽祭のサイトの中にあるこのアーノンクールのサイトでは、おそらく最も詳細なディスコグラフィをジャケット写真付きで見ることが可能)

* * *

バッハと並び、バロック音楽のレパートリーではアーノンクールにとって最重要な作曲家、ヘンデル。それゆえに主要な管弦楽曲・協奏曲だけでなく、オラトリオや歌劇の上演・録音も数多く手がけてきている。ヘンデルの最もポピュラーな作品である《メサイア》は、1982年11月、ストックホルムのベルワルト・ホールで、エリザベス・ゲイル(ソプラノ)、マリヤナ・リボヴシェク(アルト)、ヴェルナー・ホルヴェーク(テノール)、ロデリック・ケネディ(バス)、エリック・エリクソン指揮するストックホルム室内合唱団との共演で行われた演奏をテルデックにライブ録音しており、名演として高い評価を得ている。このディスクはそれ以来22年を経ての再録音となるもので、2004年12月にムジックフェラインにおける演奏会でライブ収録された。「この上なく自然な音楽の流れに何より驚かされた。(……)ひとつひとつの音のニュアンスが格段に豊富になり、音楽全体がこの上なく豊かになっているのである。それとともに、テンポ設定がより自由になっているところも大きな特徴といえるだろう。その最たる曲が第2部の終わりを飾るあの〈ハレルヤ〉である。ゆっくりとしたピアノシモ

で開始した音楽は気持ちの高ぶりとともに速度を増し、至福の感情へと到達していく。コンツェントゥス・ムジクスの自在な演奏には、古楽の最古参のひとつとしての風格が備わっている」(岡本稔氏、『レコード芸術』2005年3月号)と絶賛されている。

クリスティーネ・シェーファー(ソプラノ)

ベルリンにてイングリット・フィグアの許で学びながら、同時にアーリン・オジェー、アリベルト・ライマン、ディートリヒ・フィッシャー=ディースカウらに学ぶ。1997年ザルツブルク音楽祭で《後宮からの誘拐》のコンスタンツェ役を歌い、これがキャリアにおける画期となる。また当たり役として《ルル》の題名役があり、コヴェント・ガーデンでセンセーショナルな成功を収めたほか、ザルツブルク音楽祭およびメトロポリタン・オペラへのデビューも同役で果たし、2003年にはベルリン州立歌劇場でも歌った。コンサート歌手としてもバロックから現代までをフォローし、アバド、ブーレーズ、エッシェンバッハ、ラトル、ティーレマン等と共演。アリベルト・ライマンやマティアス・ピンチャーなど同時代作品の初演にも関わる。リート歌手としても高い評価を得ている。

アンナ・ラーソン(アルト)

ストックホルムのオペラ・アカデミーで学び、さらにクリスタ・ルーツヴィヒにも師事。1995年にデビューして以来、オラトリオ、コンサート歌手として早くから注目を集め、アバド、ハイティンク、メータ、パレンボイム、小澤征爾らと共演を重ねている。オペラでは、ベルリン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場、フィンランド国立歌劇場における《ニーベルングの指環》(エルダ)、エクス=プロヴァンス音楽祭での《ボッペアの戴冠》(オットーネ)、ストックホルム王立歌劇場でのヘンデル《オルランド》の題名役、ドロッツニグホルム歌劇場でのヘンデル《タメルラノ》(アンドロニコ)などで出演している。

ミヒャエル・シャーデ(テノール)

1965年生まれ。ドイツ人とカナダ人を両親に持つ。大学で入った合唱団でその才能を見出され、カーティス音楽院で学ぶかたわら、サンフランシスコ歌劇場のメローラ・プログラムで研鑽を積む。現在ウィーン国立歌劇場を中心に、ニューヨーク、サンフランシスコ、シカゴ、ミラノ、パリ、ハンブルクなどの欧米主要歌劇場の常連で、モーツァルト、ロッシーニ、ヴェルディ、ワーグナー、R.シュトラウスなどのオペラの多彩な役をレパートリーに持つ。またコンサート歌手としても、バツ

ハの受難曲、マーラーの《大地の歌》、ブリテンの《戦争レクイエム》などの作品で、世界の著名オーケストラ・指揮者と共演を重ねている。録音では、ブーレーズ指揮の《大地の歌》、リリング指揮の《マタイ》、ヨハネの両受難曲、《天地創造》、メンデルスゾーンの《エリア》、リストの《キリスト》、ガーディナー指揮の《魔笛》、《天地創造》、《レオノーレ》、アーノンクール指揮の《マタイ受難曲》、《天地創造》、ヴェルディ《レクイエム》などがある。

ジェラルド・フィンレイ (バス)

カナダ生まれ。オタワの合唱団で歌った後、イギリスのロイヤル・カレッジ・オブ・ミュージック、ケンブリッジ・キングズ・カレッジ、ナショナル・オペラ・スタジオで声楽を学び修める。レパートリーはきわめて広く、共演した指揮者はアーノンクール、バップーノ、ラトル、ノリントン、ガーディナーなど。《フィガロの結婚》(ドン・ジョヴァンニ)など、モーツァルトのオペラに定評があるが、アルガンテ、アキレス、ガリバルドの役でヘンデルにも取り組んでいる。また、M.-A.ターネジ《The Silver Tassie》(イングリッシュ・ナショナル・オペラ)、K.サーリアホ《L'amour de loin》など、多くの現代オペラ作品を世界初演している。コンサートおよびリート歌手としても国際的な活動を展開中。レパートリーはバッハ、

ヘンデル、ハイドンから、ブリテン、ストラヴィンスキー、ヴェーベルンにまで及ぶ。

アルノルト・シェーンベルク合唱団

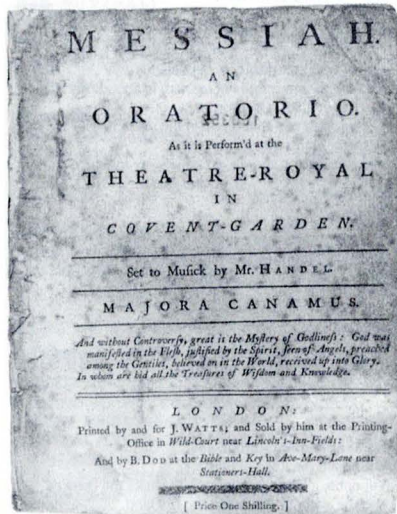
アーノンクールの指揮する合唱付きの作品では欠かすことの出来ないアルノルト・シェーンベルク合唱団は、エルヴィン・オルトナーによって1972年に創設された。メンバーはウィーン音楽大学声楽科の卒業生と在学生が中心で、レパートリーはルネッサンスから現代音楽におよび、無伴奏からオーケストラ付きの大曲までを見事に歌いわけ。アーノンクールとは20年以上共演を続けており、モンテヴェルディの《聖母マリアの夕べの祈り》、バーセルの《ダイドーとエネアス》、《妖精の女王》、バッハの《マタイ》、ヨハネ両受難曲、ミサ曲口短調、ヘンデルの《テオドーラ》《サムソン》、ハイドンの《天地創造》と《四季》、モーツァルトの宗教声楽曲全曲、ベートーヴェンの第9交響曲と《ミサ・ソレムニス》、《フィデリオ》、シューベルトのミサ曲などの録音は名盤として知られている。

[ソニー・クラシカルの資料による]

※解説は、2007年発売時のものを転載しております。

Cover of the libretto,
Covent Garden Theatre, London

コヴェント・ガーデン劇場で上演
されたときのリブレットの表紙



George Frideric Handel Messiah

DISC 1

Part I / Teil I

[1] No.1: Sinfony (Overture)

[2] No.2: Accompagnato (Tenor)

Comfort ye, comfort ye my people, saith your God.
Speak ye comfortably to Jerusalem,
and cry unto her, that her warfare is accomplish'd,
that her iniquity is pardon'd.
The voice of him that crieth in the wilderness:
Prepare ye the way of the Lord,
make straight in the desert a highway for our God.

[3] No.3: Air (Tenor)

Ev'ry valley shall be exalted,
and ev'ry mountain and hill made low;
the crooked straight, and the rough places plain.

[4] No.4: Chorus

And the glory, the glory of the Lord shall be revealed.
And all flesh shall see it together,
for the mouth of the Lord hath spoken it.

[5] No.5: Accompagnato (Bass)

Thus saith the Lord of Hosts:
Yet once, a little while, and I will shake the heav'n's
and the earth, the sea and the dry land,
and I will shake all nations; and the desire

ジョージ・フリデリック・ヘンデル メサイア

DISC 1

第1部

第1曲 シンフォニー(序曲)

第2曲 伴奏つきレチタティーヴォ(テノール)

「慰めよ、慰めよ、私の民を」とあなたがたの神は仰せられる。
「エルサレムに優しく語りかけよ、
これに呼びかけよ、その苦しみの時は終わり、
その咎は償われた」。
荒野に呼ばわる者の声がする。
「主の道を整えよ、
荒地で、私達の神のために、大路を平らにせよ」。
(イザヤ書第40章1〜3節)

第3曲 アリア(テノール)

すべての谷は埋め立てられ、
すべての山や丘は低くなる、
盛り上がった地は平地に、険しい地は平野となる。
(イザヤ書第40章4節)

第4曲 合唱

このようにして、主の栄光が現わされると、
すべての者が共にこれを見る、
主の口が語られたからだ。
(イザヤ書第40章5節)

第5曲 伴奏つきレチタティーヴォ(バス)

まことに、万軍の主はこう仰せられる:
しばらくして、もう一度、
私は天と地と、海と陸とを揺り動かす、
私は、すべての国々を揺り動かす、さればすべての国々の願うところ

of all nations shall come.

The Lord, whom ye seek,
shall suddenly come to His temple, ev'n the
messenger of the Covenant, whom you delight in:
Ye behold, He shall come, saith the Lord of Hosts.

[6] No.6: Air (Alto)

But who may abide the day of His coming,
and who shall stand when He appeareth?
For He is like a refiner's fire.

[7] No.7: Chorus

And He shall purify the sons of Levi,
that they may offer unto the Lord
an offering in righteousness.

Recitative (Alto)

Behold, a virgin shall conceive, and bear a son,
and shall call His name Emmanuel, God with us.

[8] No.8: Air (Alto) and chorus

Alto

O thou that tellest good tidings to Zion,
get thee up into the high mountain;
o thou that tellest good tidings to Jerusalem,
lift up thy voice with strength, be not afraid;
say unto the cities of Judah, behold your God!
O thou that tellest good tidings to Zion,
arise, shine: for thy light is come,
and the glory of the Lord is risen upon thee.

のものがもたらされよう。

(ハガイ書第2章6、7節)

あなたが尋ね求めている主が、
突然、その神殿に來られる、
「あなたが望んでいる契約の使者が、
見よ、来ている」と万軍の主は仰せられる。

(マラキ書第3章1節)

第6曲 アリア(アルト)

だれがこの方の來られる日に耐えられよう、
だれが、この方の現われるとき立っていられようか。まことに、この方
は精錬する者の火のようだ。

(マラキ書第3章2節)

第7曲 合唱

この方は、レビの子らをきよめ、
主に、義の献物を
献げる者となり。

(マラキ書第3章3節)

レチタティーヴォ(アルト)

見よ、処女がみごもり、男の子を産み、その名をエマヌエルと名づける、
“神は我々と共にいます”。

(イザヤ書第7章14節)

第8曲 アリア(アルト)と合唱

Alto

シオンに良い知らせを伝える者よ、
高き山に登れ。
エルサレムに良い知らせを伝える者よ、
力の限り声をあげよ、声をあげよ。恐れるな、
ユダの町々に言え。「見よ、あなたがたの神を」。
シオンに良い知らせを伝える者よ、
起きよ、光を放て、あなたがたの光が來られた。
主の栄光があなたの上に輝いているからだ。

(イザヤ書第40章9節)

Chorus

O thou that tellest good tidings to Zion,
good tidings to Jerusalem,
say unto the cities of Judah, behold your God!
The glory of the Lord is risen upon thee.

9 No.9: Accompagnato (Bass)

For behold, darkness shall cover the earth,
and gross darkness the people: but the Lord shall arise
upon thee, and His glory shall be seen upon thee.
And the Gentiles shall come to thy light,
and kings to the brightness of thy rising.

10 No.10: Air (Bass)

The people that walked in darkness
have seen a great light;
and they that dwell in the land of the shadow of death,
upon them hath the light shined.

11 No.11: Chorus

For unto us a Child is born, unto us a Son is given,
and the government shall be upon His shoulder;
and His name shall be called:
Wonderful, Counsellor,
The Mighty God, The Everlasting Father,
The Prince of Peace.

12 No.12: Pifa

Recitative (Soprano)

There were shepherds abiding in the field,
keeping watch over their flock by night.

合唱

シオンに良い知らせを伝える者よ、エルサレムに良い知らせを伝える
者よ、ユダの町々に言え:
「見よ、あなたがたの神を。
主の栄光があなたの上に輝いているからだ」。

(イザヤ書第60章1節)

第9曲 伴奏つきレチタティーヴォ(バス)

見よ、闇が地をおおい、暗闇が諸国の民をおっている:
しかし、あなたの上には主が輝き、
その栄光があなたの上に現われる。
国々はあなたの光のうちに歩み、
王達はあなたの輝きに照らされて歩む。

(イザヤ書第60章2、3節)

第10曲 アリア(バス)

闇の中を歩んでいた民は、
大きな光を見た。
死の陰の地に住んでいた者達の上に
光が照った。

(イザヤ書第9章2節)

第11曲 合唱

ひとりのみどり子が、私達のために生まれる、ひとりの男の子が、私
達にと与えられる、主権はその肩にあり、
その名は
「不思議な助言者、
力ある神、永遠の父、
平和の君」と呼ばれる。

(イザヤ書第9章6節)

第12曲 ピファ(田園シンフォニー)

レチタティーヴォ(ソプラノ)

さてこの土地に、羊飼いの達が、
野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。

(ルカ伝第2章8節)

13 No.13: Accompagnato (Soprano)

And lo! the angel of the Lord came upon them,
and the glory of the Lord shone round about them,
and they were sore afraid.

Recitative (Soprano)

And the angel said unto them,
Fear not: for behold,
I bring you good tidings of great joy, which shall
be to all people. For unto you is born this day
in the city of David a Saviour,
which is Christ the Lord.

14 No.14: Accompagnato (Soprano)

And suddenly there was with the angel
a multitude of the heav'nly host,
praising God, and saying:

15 No.15: Chorus

Glory to God in the highest,
and peace on earth, goodwill towards men.

16 No.16: Air (Soprano)

Rejoice greatly, O daughter of Zion,
shout, O daughter of Jerusalem:
behold, thy King cometh unto thee.
He is the righteous Saviour,
and He shall speak peace unto the heathen.

Recitative (Alto)

Then shall the eyes of the blind be open'd,
and the ears of the deaf unstopped;

第13曲 伴奏つきレチタティーヴォ(ソプラノ)

すると、主の使いが彼等のところに来て、
主の栄光が周りを照らしたので、
彼等はひどく恐れた。

(ルカ伝第2章9節)

レチタティーヴォ(ソプラノ)

御使いは彼等と言った:
「恐れることはありません。今、私はすべての民に素晴らしい喜びを知
らせに来たのです。
今日ダビデの町で、あなたの方のために、救い主がお生まれになりまし
た。
この方こそ主キリストです」。

(ルカ伝第2章10、11節)

第14曲 伴奏つきレチタティーヴォ(ソプラノ)

すると、たちまち、その御使いと共に
多くの天の軍勢が現われて、
神を讃美して言った。

第15曲 合唱

いと高きところに、栄光が神にあるように。
地の上に平和が、御心にかなう人々にあるように。

(ルカ伝第2章13、14節)

第16曲 アリア(ソプラノ)

シオンの娘よ、大いに喜べ。
エルサレムの娘よ、喜び叫べ。
見よ、あなたの王があなたのところへ来られる。
この方は正しい方で、
救いを賜われ、諸国の民に平和を告げる。

(ゼカリヤ書第9章9、10節)

レチタティーヴォ(アルト)

その時盲人の目は開かれ、
聾者の耳は開けられる;

then shall the lame man leap as an hart,
and the tongue of the dumb shall sing.

- [17] **No.17: Duet (Alto, Soprano)**
He shall feed His flock like a shepherd,
and He shall gather the lambs with His arm,
and carry them in His bosom,
and gently lead those that are with young.

Come unto Him, all ye that labour,
come unto Him that are heavy laden,
and He will give you rest.
Take his yoke upon you, and learn of Him;
for He is meek and lowly of heart:
and ye shall find rest unto your souls.

- [18] **No.18: Chorus**
His yoke is easy, and His burthen is light.

Part II / Teil II

- [19] **No.19: Chorus**
Behold the Lamb of God,
that taketh away the sin of the world.

- [20] **No.20: Air (Alto)**
He was despised and rejected of men,
a man of sorrows, and acquainted with grief.

He gave His back to the smiters,

その時足なえ人は鹿のようにとびはね、
おしの舌は喜び歌う。

(イザヤ書第35章5、6節)

第17曲 二重唱 (アルト、ソプラノ)
主は羊飼いのように、その群れを養い、
御腕に子羊を引き寄せ、
ふところに抱き、
乳を飲ませる羊を優しく導かれる。

(イザヤ書第40章11節)

すべての疲れた人、重荷を負っている人は、
私のところへ来なさい。
私があなたを休ませてあげます。
私は心優しく、へりくだっているから、
あなた方も私のくびきを負って、私から学びなさい。
そうすれば魂に安らぎが来ます。

(マタイ伝第11章28、29節)

第18曲 合唱
私のくびきは負いやすく、私の荷は軽いからです。
(マタイ伝第11章30節)

第2部

第19曲 合唱
見よ、世の罪を取り除く神の小羊。

(ヨハネ伝第1章29節)

第20曲 アリア (アルト)
彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、
悲しみの人にして悩みを知っていた。

(イザヤ書第53章3節)

打つ者に彼の背中を任せ、

and His cheeks to them that plucked off the hair.
He hid not His face from shame and spitting.

DISC 2

- [1] **No.21: Chorus**
Surely He hath borne our griefs
and carried our sorrows;
He was wounded for our transgressions,
He was bruised for our iniquities;
the chastisement of our peace was upon Him.

- [2] **No.22: Chorus**
And with His stripes we are healed.

- [3] **No.23: Chorus**
All we like sheep have gone astray;
we have turned ev'ry one to his own way;
and the Lord hath laid on Him the iniquity of us all.

- [4] **No.24: Accompagnato (Tenor)**
All they that see Him, laugh Him to scorn;
they shoot out their lips, and shake their heads, saying:

- [5] **No.25: Chorus**
He trusted in God that He would deliver Him;
let Him deliver Him, if He delight in Him.

- [6] **No.26: Accompagnato (Soprano)**
Thy rebuke hath broken His heart: He is full of heaviness.

ひげを抜く者に彼の頬を任せ、
侮辱されても、つばきをかけられても、彼の顔を隠さなかった。
(イザヤ書第50章6節)

DISC 2

第21曲 合唱
まことに彼は私達の悩みを負い、
私達の悲しみを担った;
私達のそむきのために彼は刺し通され、
私達の咎のために砕かれた。
彼への懲らしめが私達に平安をもたらした。

(イザヤ書第53章4節)

第22曲 合唱
彼の打ち傷によって、私達はいやされた。
(イザヤ書第53章5節)

第23曲 合唱
私達は皆、羊のようにさまよい、
各々、自分勝手な道に向かって行った。
しかし主は、私達のすべての咎を自らに負わせられた。
(イザヤ書第53章6節)

第24曲 伴奏つきレチタティーヴォ (テノール)
私を見る者は皆、私をあざけります;
彼等は口をとがらせ、頭を振って言います。
(詩篇第22編8節)

第25曲 合唱
主に身を任せよ、彼が助け出したら良い。
彼に救い出させよ、彼の御氣に入りなのだから。
(詩篇第22編9節)

第26曲 伴奏つきレチタティーヴォ (ソプラノ)
そしりが私の心を打ち砕き、私はひどく病んでいます。

He looked for some to have pity on Him,
but there was no man, neither found He any
to comfort him.

[7] No.27: Arioso (Soprano)

Behold, and see if there be any sorrow
like unto His sorrow!

[8] No.28: Accompagnato (Tenor)

He was cut off out of the land of the living;
for the transgression of Thy people was He stricken.

[9] No.29: Air (Tenor)

But Thou didst not leave His soul in hell;
nor didst Thou suffer Thy Holy One to see corruption.

[10] No.30: Chorus

Lift up your heads, O ye gates; and be ye lift up,
ye everlasting doors,
and the King of Glory shall come in!
Who is this King of Glory?
The Lord strong and mighty, the Lord mighty in battle.
The Lord of Hosts, He is the King of Glory.

Recitative (Tenor)

Unto which of the angels said He at any time:
Thou art My Son, this day have I begotten Thee?

[11] No.31: Chorus

Let all the angels of God worship Him.

私は同情者を待ち望みましたが、ひとりもいません。
慰める者を待ち望みましたが、見つめることは出来ませんでした。
(詩篇第69編21節)

第27曲 アリオソ (ソプラノ)

見よ、このような痛みが
ほかにあるかどうかを!
(哀歌第1章12節)

第28曲 伴奏つきレチタティーヴォ (テノール)

彼が私の民のそむきの罪のために打たれ、
生ける者の地から絶たれたことを。
(イザヤ書第53章8節)

第29曲 アリア (テノール)

しかしあなたは私の魂を黄泉に捨て置かず、
あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。
(詩篇第16編10節)

第30曲 合唱

門よ、お前達のかしらを上げよ。
永遠の戸よ、上げれ。
栄光の王が入って来られる。
栄光の王とは誰か。
強く、力ある主、戦いに力ある主。
その栄光の王とは誰か。万軍の主、これぞ栄光の王。
(詩篇第14編7～10節)

レチタティーヴォ (テノール)

神は、かつてどの御使に向かって、こう言われたでしょう:「あなたは私
の子。今日、私はあなたを生んだ」。
(ヘブル書第1章5節)

第31曲 合唱

神の御使いは皆、彼を拝め。
(ヘブル書第1章6章)

[12] No.32: Air (Alto)

Thou art gone up on high,
Thou hast led captivity captive,
and received gifts for men,
yea, even from Thine enemies,
that the Lord God might dwell among them.

[13] No.33: Chorus

The Lord gave the word:
great was the company of the preachers.

[14] No.34a: Air (Soprano)

How beautiful are the feet of them
that preach the gospel of peace,
and bring glad tidings of good things.

[15] No.35a: Chorus

Their sound is gone out into all lands,
and their words unto the ends of the world.

[16] No.36: Air (Bass)

Why do the nations so furiously rage together,
and why do the people imagine a vain thing?
The kings of the earth rise up,
and the rulers take counsel together against the Lord
and against His anointed.

[17] No.37: Chorus

Let us break their bonds asunder,
and cast away their yokes from us.

第32曲 アリア (アルト)

あなたは、いと高き所に上がり、
捕われた者を虜にし、
人々から、みづぎを受けられました。
頑迷な者どもからさえも、
神であられる主が、そこに住まわれるために。

(詩篇第68編19節)

第33曲 合唱

主は御言葉を賜わる。
良きおとずれを告げる女達は大きな群れを成している。
(詩篇第68編12節)

第34曲a アリア (ソプラノ)

平和の福音を説き
良いことのお知らせを伝える人々の足は、
なんと立派でしょう。
(ロマ書第10章15節)

第35曲a 合唱

その声は全地に響き渡り、
その言葉は地の果てまで届いた。
(ロマ書第10章18節)

第36曲 アリア (バス)

なぜ国々は騒ぎ立ち、
国民はむなしくつぶやくか。
地の王達は立ち構え、
治める者達は相ともに集まり、主と、
主に油を注がれた者にと逆らう。
(詩篇第2編1、2節)

第37曲 合唱

さあ、彼等の枷を打ち砕き、
彼等のくびきを解き捨てよう。
(詩篇第2編3節)

Recitative (Tenor)

He that dwelleth in Heaven shall laugh them to scorn,
the Lord shall have them in derision.

レチタティーヴォ (テノール)

天の御座に着いておられる方は笑ひ、
主はその者どもをあざけられる。

(詩篇第2編4節)

第38曲 アリア (テノール)

あなたは鉄の杖で彼等を打ち砕き、
焼物の器のように粉々にする。

(詩篇第2編9節)

第39曲 合唱

ハレルヤ、万物の支配者である、我らの神である主は王となられた。
ハレルヤ!
この世の国は
私達の主およびそのキリストのものとなった、
主は永遠に支配される。ハレルヤ!
王の王、主の主。
主は永遠に支配される。ハレルヤ!

(ヨハネ黙示録第19章6節、第11章15節、第19章16節)

第3部

第40曲 アリア (ソプラノ)

私は知っている。私を贖う方は生きておられ、
後の日に地の上に立たれることを。
私の皮が、このようにはぎとられて後、
私は私の肉から神を見る。

(ヨブ記第19章25、26節)

しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として
死者の中から甦られました。

(コリント前書1第15章20節)

第41曲 合唱

というのは、死がひとりの人を通して来たように
死者の復活もひとりの人を通して来たからです。

[18] No.38: Air (Tenor)

Thou shalt break them with a rod of iron;
Thou shalt dash them in pieces like a potter's vessel.

[19] No.39: Chorus

Hallelujah, for the Lord God Omnipotent reigneth,
Hallelujah!
The Kingdom of this world is become
the Kingdom of our Lord, and of His Christ;
and He shall reign for ever and ever, Hallelujah,
King of Kings, and Lord of Lords,
and He shall reign for ever and ever, Hallelujah!

Part III / Teil III

[20] No.40: Air (Soprano)

I know that my Redeemer liveth,
and that He shall stand at the latter day upon the earth.
And tho' worms destroy this body,
yet in my flesh shall I see God.

For now is Christ risen from the dead,
the first fruits of them that sleep.

[21] No.41: Chorus

Since by man came death,
by man came also the resurrection of the dead.

For as in Adam all die,
even so in Christ shall all be made alive.

[22] No.42: Accompagnato (Bass)

Behold, I tell you a mystery;
we shall not all sleep,
but we shall all be chang'd, in a moment,
in the twinkling of an eye, at the last trumpet.

[23] No.43: Air (Bass)

The trumpet shall sound,
and the dead shall be rais'd incorruptible,
and we shall be chang'd.
For this corruptible must put on incorruption,
and this mortal must put on immortality.

Recitative (Alto)

Then shall be brought to pass the saying that is written,
death is swallowed up in victory.

[24] No.44: Duet (Alto & Tenor)

O death, where is thy sting?
O grave, where is thy victory?
The sting of death is sin,
and the strength of sin is the law.

[25] No.45: Chorus

But thanks be to God,
who giveth us the victory
through our Lord Jesus Christ.

すなわち、アダムに会ってすべての人が死んでいるように、
キリストによってすべての人が生かされるからです。

(コリント前書1第15章21、22節)

第42曲 伴奏つきレチタティーヴォ (バス)

聞きなさい、私はあなたがたに奥義を告げましょう。
私達は皆が眠ってしまうのではなく、
皆、変えられるのです。
終わりのラッパと共に、たちまち一瞬のうちにです。

(コリント前書1第15章51、52節)

第43曲 アリア (バス)

ラッパが鳴ると、
死者は朽ちない者に甦り、
私達は変えられるのです。
朽ちる者は、必ず朽ちないものを着なければならず、
死すべき者は、必ず不死を着なければならぬからです。

(コリント前書1第15章52、53節)

レチタティーヴォ (アルト)

死は勝利に呑まれたとされる御言葉が
実現します。

(コリント前書1第15章54、55節)

第44曲 二重唱 (アルトとテノール)

死よ、お前の勝利はどこにあるのか。
死よ、お前のとげはどこにあるのか。
死のとげは罪であり、
罪の力は律法です。

(コリント前書1第15章55、56節)

第45曲 合唱

しかし神に感謝すべきです、
神は、私達の主イエス・キリストによって、
私達に勝利を与えて下さいました。

(コリント前書1第15章57節)

26

No.46: Air (Soprano)

If God be for us,
who can be against us?
Who shall lay anything to the charge of God's elect?
It is God that justifieth,
who is he that condemneth?
It is Christ that died,
yea rather, that is risen again,
who is at the right hand of God,
who makes intercession for us.

27

No.47: Chorus

Worthy is the Lamb that was slain,
and hath redeemed us to God by His blood,
to receive power, and riches,
and wisdom, and strength,
and honour, and glory, and blessing.
Blessing and honour, glory and pow'r,
be unto Him that sitteth upon the throne,
and unto the Lamb, for ever and ever.
Amen.

第46曲 アリア (ソプラノ)

神が私達の味方であるなら、
誰が私達に敵対できるでしょう。
神に選ばれた人々を訴えるのは誰ですか。
神が義と認めて下さるのです。
罪に定めようとするのは誰ですか。
死んで下さった方、
いや、甦られた方であるイエス・キリストが、
神の右の座に着かれ、
私達のためにとりなして下さるのです。

(ロマ書第8章31、33、34節)

第47曲 合唱

ほふられた小羊は、
力と、富と、
知恵と、勢いと、
誉れと、栄光と、讃美を
受けるにふさわしい方です。
御座にすわる方と、
小羊と共に、
讃美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。
アーメン。

(ヨハネ黙示録第5章12、13節)

[訳:村原京子]

訳詞にあたって、日本聖書刊行会発行の聖書(昭和45年9月1日
発行)を定本としました。

ベスト・クラシック100 ラインナップ

1枚 ¥1,600+税 / 2枚組 ¥2,400+税

曲目詳細は公式サイト www.bestclassics100.jp をご覧ください。

No. 1	ブルーノ・ワルター	モーツァルト:交響曲第40番、第41番「ジュピター」&アイネクライネ・ナハトムジーク	SICC-30310
No. 2	ブルーノ・ワルター	モーツァルト:交響曲第40番&第25番(ウィーン・フィル、'52年&'56年ライヴ)	SICC-30311
No. 3	ブルーノ・ワルター	ベートーヴェン:交響曲第5番「運命」&第6番「田園」	SICC-30312
No. 4	ブルーノ・ワルター	ブラームス:交響曲第4番&ハイドンの主題による変奏曲	SICC-30313
No. 5	ブルーノ・ワルター	マーラー:交響曲第1番「巨人」	SICC-30314
No. 6	レナード・バーンスタイン	ドヴォルザーク:交響曲第9番「新世界より」&序曲「謝肉祭」ほか	SICC-30315
No. 7	レナード・バーンスタイン	ショスタコーヴィチ:交響曲第5番&チェロ協奏曲第1番*(ヨーヨー・マ、オーマンディ指揮)	SICC-30316
No. 8	レナード・バーンスタイン	星条旗よ永遠なれ〜マーチ名曲集	SICC-30317
No. 9	レナード・バーンスタイン	ガーシュウィン:ラプソディ・イン・ブルー&バリのアメリカ人 ほか	SICC-30318
No. 10	小澤 征爾	モーツァルト:交響曲第40番&第41番「ジュピター」	SICC-30319
No. 11	小澤 征爾	プロコフィエフ:ピアノと狼/サン・サ:動物の園舞曲/ブリテン:青少年のための管弦楽入門	SICC-30320
No. 12	小澤 征爾	マーラー:交響曲第2番「復活」	SICC-30321~2
No. 13	小澤 征爾	武満徹:ノヴェン・バース・ステップス ほか	SICC-30323
No. 14	セルジュ・チェリビダッケ	ブルックナー:交響曲第4番「ロマンティック」	SICC-30324~5
No. 15	ギュンター・ヴァント	ブラームス:交響曲第1番/シューベルト:交響曲第5番(北ドイツ放送響、ライヴ)	SICC-30326
No. 16	ギュンター・ヴァント	ブルックナー:交響曲第8番(ベルリン・フィル、ライヴ)	SICC-30327~8
No. 17	ニコラウス・アーノンクール	ブラームス:ドイツ・レクイエム	SICC-30329
No. 18	ニコラウス・アーノンクール	ヘンデル:メサイア	SICC-30330~1
No. 19	ニコラウス・アーノンクール	モーツァルト:レクイエム	SICC-30332
No. 20	バーヴォ・ヤルヴィ	ベートーヴェン:交響曲第3番「英雄」&序曲集	SICC-30333
No. 21	バーヴォ・ヤルヴィ	ベートーヴェン:交響曲第7番&第8番	SICC-30334
No. 22	バーヴォ・ヤルヴィ	ブルックナー:交響曲第7番	SICC-30335
No. 23	クリスティアン・ティレマン	ベートーヴェン:交響曲第5番「運命」&交響曲第7番	SICC-30336
No. 24	クリスティアン・ティレマン	ベートーヴェン:交響曲第9番「合唱」	SICC-30337
No. 25	カルロス・クライバー	ニューイヤーク・コンサート1992	SICC-30338
No. 26	テオドール・クルレンツィス	モーツァルト:歌劇「フィガロの結婚」ハイライト	SICC-30339
No. 27	デイヴィッド・ジンマン	マーラー:交響曲第5番	SICC-30340
No. 28	ピエール・ブレーズ	ストラヴィンスキー:春の祭典&ベトル・シュカ	SICC-30341
No. 29	レナード・スラットキン	トランペット吹きの日・ロイ・アンダーソン・パスト	SICC-30342
No. 30	ジョン・ウィリアムズ(指揮者)	ジョン・ウィリアムズ:グレイテスト・ヒッツ 1969-1999	SICC-30343~4
No. 31	アルトゥーロ・トスカニーニ	レスピーギ:ローマ三部作〜ローマの松、ローマの噴水&ローマの祭り	SICC-30345
No. 32	ジョージ・セル	バルトーク:オーケストラのための協奏曲/ヤナーチェク:シンフォニエッタ	SICC-30346
No. 33	グスタフ・フレンツ	パッサミサ曲 口短調(全曲)	SICC-30347~8
No. 34	グレン・グールド&ヘルベルト・フォン・カラヤン	ベートーヴェン:ピアノ協奏曲第3番/シベリウス:交響曲第5番('57年ベルリン・ライヴ)	SICC-30349
No. 35	グレン・グールド	J.S.バッハ:ゴルトベルク変奏曲(55年モノラル録音)	SICC-30350
No. 36	グレン・グールド	J.S.バッハ:ゴルトベルク変奏曲(81年デジタル録音)	SICC-30351